



スポーツ指導者のコンピテンシーに関する実証的研究

高松, 祥平

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2019-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7072号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007072>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 高松 祥平
専 攻 人間発達専攻
指導教員氏名 山口 泰雄

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

スポーツ指導者のコンピテンシーに関する実証的研究

論文要旨

スポーツ指導者のコンピテンシーに関する先行研究を概観した結果、海外で数多く援用されているCoaching Competency Scale (CCS; Myers et al., 2006)あるいはAthletes' Perceptions of Coaching Competency ScaleII- High School Teams (APCCSII-HST; Myers et al., 2010)が我が国において適用可能であるかを検証する必要性が示された。また、国内や地域レベルでの研究の蓄積が非常に少ないため、このような文脈下での尺度作成や考察も不可欠である。以上を踏まえて、本研究の目的は、スポーツ指導者のコンピテンシーが果たす役割を多面的に明らかにすることとした。具体的には、我が国におけるAPCCSII-HSTの適用可能性を検証することと、我が国固有の文化ともいえる高校野球及び総合型地域スポーツクラブに焦点をあてて、スポーツ指導者のコンピテンシー尺度の作成並びにコンピテンシーの影響過程の検証を行った。

第2章では、APCCSII-HSTの日本における適用可能性を検証するとともに、選手によるコーチングコンピテンシーの認知が達成目標を媒介し、競技パフォーマンスの認知に及ぼす影響を明らかにした。その結果、APCCSII-HSTについては、1項目を削除したものの、確認的因子分析の結果から適用可能であることが示された。続いて構造方程式モデリングによって仮説を検証し、媒介分析を行った結果、遂行接近目標がコーチングコンピテンシーの認知と競技パフォーマンスの認知間を媒介することが明らかになった。この結果から、監督のコンピテンシーを高く認知している選手ほど他の選手よりも優れていたという気持ちが高く、そのような気持ちが競技パフォーマンスの認知へと繋がっていくことが示唆された。

第3章においては、インタビュー調査と質問紙調査を実施する混合研究法を用いて、高校野球の監督のコンピテンシーを明らかにし、量的・質的結果双方の観点から解釈を行った。インタビュー調査によって構成概念を抽出し質問紙調査によって統計的に分析した結果、高校野球における監督のコンピテンシーとして6因子24項目(「信頼関係」、「生活指導」、「観察力」、「自律性支援」、「後援関係」、「技術・戦術指導」)が得られた。そして、得られたコンピテンシーに関してインタビュー調査で得られた言語的データを用いて考察を行った。チームや選手を効果的に指導していく過程においては、精神主義や勝利至上主義から生まれる体罰や暴力は必要ではないことが示唆され、「信頼関係」や「後援関係」に代表されるような人間関係づくり、及び「自律性支援」といった、選手が主体となって行動できるような指導工夫の重要

性が示された。

第4章においては、第3章で作成した高校野球における監督のコンピテンシー尺度を用いて選手を対象に質問紙調査を実施した。監督のコンピテンシーが選手にどのような影響をもたらすのかを明らかにするため、選手による監督のコンピテンシーの認知が心理的欲求の認知を媒介して、内発的動機づけに及ぼすというモデルの検証を行った。「観察力」、「自律性支援」、及び「技術・戦術指導」の認知が「自律性の認知」を媒介し、内発的動機づけに有意な影響を及ぼした。また、「観察力」と「自律性支援」の認知は、「関係性の認知」を媒介として内発的動機づけに有意な影響を及ぼした。この結果より、監督が自分たちを見てくれている、自分たちが主体となって活動することを推奨してくれる、そしてプレイ面について指導してくれると選手が認知し、自分たちの意志が練習や試合において尊重されていると感じたり、チームメイトから理解を得られていると感じることで、さらなる向上心や野球に対する喜びに繋がっていくことが示唆された。

第5章においては、学校運動部活動並びに競技スポーツから視点を変え、生涯スポーツの観点から総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度を作成した。具体的には、ソートリストティング法を用いた調査によりコンピテンシーを構成する概念を抽出し、質問紙調査によって尺度の信頼性・妥当性の検証を行った。結果、総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度として「マナー教育」、「協働的アプローチ」、「マネジメント」、「指導力」、「クラブ外交流」、「クラブ内交流」、「安全管理」の7因子35項目が抽出された。特に、「クラブ外交流」、「クラブ内交流」の因子は先行研究ではみられなかった要因であり、会員のクラブ内外における多様な活動を促進する必要性を示唆するとともに、スポーツ指導者自身もクラブの一員として地域に根差した活動が求められていることが明らかになった。

第6章においては、第5章で作成した尺度を用いて、同じく総合型地域スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に質問紙調査を実施し、コンピテンシーの自己評価を通して職務満足及び組織コミットメントに及ぼす影響を明らかにした。その結果、「協働的アプローチ」と「マネジメント」が職務満足に影響を及ぼし、職務満足が組織コミットメントに影響を及ぼした。さらに、「クラブ内交流」が直接的に組織コミットメントに影響を及ぼすことが明らかになった。つまり、会員目線で会員の自律的な活動を促す協調スタイルのコーチングを実施し、クラブでの活動をうまくマネジメントしていると認知している指導者ほど、スポーツ指導者としての満足感が得られており、そのような満足感を得ることが所属クラブへの愛着に繋がっていると考えられる。また、日常のコーチング活動において他の種目の指導者や会員と交流したりすることで、スポーツ指導者が所属するクラブへの愛着が高まっていくことが示唆された。加えて、男性と女性間で類似点や差異があるかどうかを探るために母母集団分析を実施した結果、「クラブ内交流」が組織コミットメントに及ぼす影響において男女間で違いがみられた。男性のスポーツ指導者と女性のスポーツ指導者ともにコミュニケーションの重要性は認識されているものの、本研究結果は女性のスポーツ指導者の方がさらにそのような会話が重要であることを示した。

近年、勝利至上主義、苦役主義等から生まれるスポーツ指導者の様々な問題がメディアに取り上げられるようになり、その質が問われている。しかしながら、新しいスポーツ指導が模索されつつあるものの、日本におけるスポーツ指導者の現状を把握し、スポーツ指導者に必要と

される行動や指導者と選手との関係性に関する実証的な研究が少ないのが現状であった。高校運動部活動に関する研究の結果から、改めて選手の自主性や自律性を支援するような指導の必要性、鋭い観察に基づき選手やチーム全体の課題点や気づいた点を把握し、的確な指示・アドバイスを送れるような観察力の重要性が明らかになった。総合型地域スポーツクラブに関する一連の研究結果から、競技力向上を目指した技術指導のみならず、協働的なスタイルでのコーチングや、総合型地域スポーツクラブ内外における人々や団体との関係づくりの必要性が示唆された。総合型地域スポーツクラブにおいては財源確保の面からも十分な指導報酬を望むことは困難であり、報酬を目的としないスポーツ指導者が大半を占める。このようなスポーツ指導者の継続的な指導活動を支えるのは、自身の指導に対する満足感やクラブへの愛着であり、これらはクラブ内での交流活動や会員への協働的なアプローチを通して高められていくことが明らかになった。よって、クラブ関係者は、クラブの理念や目的を共有し、意見交換が可能なオープンスペースを整備したり、総合型地域スポーツクラブのスポーツ指導者としての指導力向上に向けた講習会の企画や参加に積極的に関与すべきと示唆された。

（氏名 高松 祥平 ， No. ）

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	高松 祥平		
論文題目	スポーツ指導者のコンピテンシーに関する実証的研究		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	山口 泰雄
	副 査	教授	長ヶ原 誠
	副 査	教授	高見 和至
	副 査	准教授	秋元 忍
	副 査	教授	國土 将平
要 旨			
申請者、高松祥平君の課程博士申請論文「スポーツ指導者のコンピテンシーに関する実証的研究」は、スポーツ指導者のコンピテンシーが果たす役割を多面的に明らかにしたものである。具体的には、海外で広く援用されているスポーツ指導者のコンピテンシー尺度であるAPCCSⅡ-HSTの我が国に適用可能性を検証し、我が国固有の文化ともいえる高校野球及び総合型地域スポーツクラブに焦点をあてて、スポーツ指導者のコンピテンシー尺度の作成並びにコンピテンシーの影響過程の検証を行った。 第1章では、スポーツ指導者の役割と背景を述べた後、本研究の中心的な概念であるコンピテンシーについて言及した。また、スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究の動向を検証し、研究課題を明らかにした。 第2章では、はじめに、複数の国で援用されているスポーツ指導者のコンピテンシー尺度であるAPCCSⅡ-HSTの我が国における適用可能性を検証した。そして、APCCSⅡ-HSTが選手の達成目標を媒介して、競技パフォーマンスの認知に及ぼす影響を明らかにした。 第3章においては、インタビュー調査と質問紙調査を実施する混合研究法を用いて、高校野球の監督のコンピテンシーを明らかにし、量的・質的結果双方の観点から解釈を行った。インタビュー調査によって構成概念を抽出し質問紙調査によって統計的に分析した結果、高校野球における監督のコンピテンシーとして6因子24項目（信頼関係、生活指導、観察力、自律性支援、後援関係、技術・戦術指導）			

が得られた。そして、抽出されたコンピテンシーに関してインタビュー調査で得られた言語的データを用いて考察を行った。

第4章においては、高校野球における監督のコンピテンシー尺度を用いて選手を対象に質問紙調査を実施した。監督のコンピテンシーが選手にどのような影響をもたらすのかを明らかにするため、選手による監督のコンピテンシーの認知が心理的欲求の認知を媒介して、内発的動機づけに及ぼすというモデルの検証を行った。観察力、自律性支援、及び技術・戦術指導の認知が自律性の認知を媒介し、内発的動機づけに有意な影響を及ぼした。また、観察力と自律性支援の認知は、関係性の認知を媒介として内発的動機づけに有意な影響を及ぼした。

第5章においては、学校運動部活動ならびに競技スポーツから視点を変え、生涯スポーツの観点から総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度を作成した。具体的には、ソートリスティング法を用いた調査によりコンピテンシーを構成する概念を抽出し、質問紙調査によって尺度の信頼性と妥当性の検証を行った。結果、総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度として、マナー教育、協働的アプローチ、マネジメント、指導力、クラブ外交流、クラブ内交流、安全管理の7因子35項目が抽出された。

第6章においては、第5章で作成した尺度を用いて、同じく総合型地域スポーツクラブのスポーツ指導者を対象に質問紙調査を実施し、コンピテンシーの自己評価を通して職務満足及び組織コミットメントに及ぼす影響を明らかにした。その結果、協働的アプローチとマネジメントが職務満足に影響を及ぼし、職務満足が組織コミットメントに影響を及ぼした。さらに、クラブ内交流が直接的に組織コミットメントに影響を及ぼすことが明らかになった。

第7章では、結論として一連の研究結果のまとめと意義、ならびにそこから導き出されるインプリケーションを提示した。そして、スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究の課題と展望について言及した。

以上のように、本論文は詳細な先行研究の検証を基にして、論理的な文章展開とコンピテンシー概念を活用した実証性を有しており、博士論文としての独創性が認められる。また、人間発達環境学にふさわしい研究方法の妥当性と研究成果が示されている。なお、申請者は、本論文に関する研究業績として、査読付論文5編（国際誌1編）を発表しており、博士学位申請の基本的要件を満たしている。

- 1) 高松祥平・山口泰雄（2015）総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度作成の試み、生涯スポーツ学研究，12（1）：13-23.
- 2) 高松祥平・山口泰雄（2015）高校野球における監督のコンピテンシーに関する研究、体育学研究，60（2）：793-806.
- 3) 高松祥平・山口泰雄（2016）スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究の動向、生涯スポーツ学研究，13（1）：1-13.
- 4) 高松祥平・山口泰雄（2016）高校野球における監督のコンピテンシーが選手の内発的動機づけに及ぼす影響、体育学研究，61（2）：461-473.
- 5) Takamatsu, S. & Yamaguchi, Y. (in press) Effect of coaching behaviors on job satisfaction and organizational commitment: The case of comprehensive community sport clubs in Japan. *International Journal of Sports Science & Coaching*.

以上のことから本審査委員会は、学位申請者の高松祥平君が博士（学術）の学位を授与されるに足りる十分な資格を有するものとして認める。